

## 論文

## 台湾の多文化家族の夫が妻から受ける虐待

尹 靖水<sup>1)</sup>・百瀬英樹<sup>2)</sup>  
黒木保博<sup>3)</sup>・中嶋和夫<sup>4)</sup>

**要約：**本調査研究は、台湾の多文化家族の夫が日常生活の中で妻から受ける Husband Abuse の頻度（潜在的ストレス）と夫の妻に対する否定的感情（ストレス認知）との関連性を明らかにすることを目的とした。調査には、台北市、高雄市、台北県、桃園県に在住する多文化家族の夫が参加した。調査内容は、属性（夫の現在と結婚時の年齢、宗教、学歴、収入、家族構成、結婚継続期間、妻の現在と結婚時の年齢、国籍、宗教、コミュニケーション能力）、夫が妻から被る虐待（Husband Abuse）の頻度、妻に対する否定的な感情で構成した。回収された 186 人のデータ（回収率 93.0%）を基礎に、多文化家族の夫が妻から被る虐待（7 因子）を独立変数、夫の妻に対する否定的感情を従属変数とする因果関係モデルのデータへの適合性を、構造方程式モデリングで解析した。このとき、統制変数として夫の収入と妻のコミュニケーション能力を投入した。その結果、前記の因子別に検討した因果関係モデルはそれぞれデータに適合した。また、前記 Husband Abuse の妻に対する否定的感情に対するパス係数は、「性的虐待」が 0.704、「社会的虐待」が 0.641、「心理的虐待」が 0.597、「言語的暴力」が 0.576、「身体的虐待」が 0.496、「経済的虐待」が 0.412、「ネグレクト」が 0.358 となっていた。潜在的ストレスがストレス認知に影響するというラザルスのストレス認知理論を前提にするなら、多文化家族の Husband Abuse 問題を、社会福祉学的な生活ニーズと位置づけ、積極的に解消することの必要性が示唆された。

キーワード：多文化家族、虐待、否定的感情

## 目次

- I. 緒言
- II. 研究方法
- III. 研究結果
  1. 属性分布
  2. 夫の妻に対する否定的感情の因子モデルのデータへの適合性
  3. Husband Abuse と夫の妻に対する否定的感情の関係
- IV. 考察

<sup>1)</sup> 梅花女子大学現代人間学部、同志社大学社会学部嘱託講師

<sup>2)</sup> 世信大学日本語文学系

<sup>3)</sup> 同志社大学社会学部

<sup>4)</sup> 岡山県立大学保健福祉学部

\*2010 年 12 月 20 日受付、2011 年 1 月 12 日掲載決定

## I. 緒 言

台湾男性の国際結婚<sup>(1)</sup>は 1980 年代を起点に増加傾向を示し、女性の国籍に着目すると、1980 年代の当初はタイやフィリピンの出身者が多数を占めていたが、1991 年以降にインドネシア出身者が急増し、さらに 1990 年代後半になるとベトナム出身者が急増している。台湾男性の多国籍の女性との国際結婚が増加した背景には、経済的側面と社会・文化的側面の二側面があることが既に指摘<sup>(2)</sup>されている。国際結婚の背景がいずれであっても、台湾では多文化家族を社会の構成員として位置づけ、その社会統合をめざす政策が展開されはじめている。しかし、台湾にかぎらず、東アジア圏の多文化家族を取り巻く生活環境は、「多文化共生」という視座から見直すと、いまだ劣悪で過酷な状況にある。たとえば、多文化家族に関連した家庭暴力 (DV) や殺人といった不幸な出来事、また家庭暴力や貧困等に起因する家庭崩壊の多発傾向がマスコミ等で報じられているところである。家庭暴力や殺人の実行者は夫に限られるものではない。しかし従来の多文化家族の夫の妻に対する虐待 Wife Abuse (妻が夫から被る虐待) に関連した研究<sup>(3)~(5)</sup>はなされているものの、妻の夫に対する虐待 Husband Abuse (夫が妻から被る虐待) に関する研究はほとんど見あたらない。多文化家族における不幸な事件や家庭崩壊を適切に予防するには、多文化家族の Husband Abuse に関する研究の蓄積も望まれよう。通常、実証的研究は因果関係を明示した仮説の設定に始まって、仮説の検証のために因果関係に含まれる変数に関する測定精度を高める必要性から、適切ではあるが調査項目が圧縮された測定尺度を使用しつつ、仮説の実証が志向される。しかし、そのようなアプローチは、日常的に遭遇する多文化家族の夫の状況がリアリティーに表現しきれない、換言するなら、専門家が具体的にどのようなことに介入する必要があるかが具体的には見えてこないと言った実践上の問題を引き起こすことを意味する。このような研究と実践の間で発生するジレンマを多文化家族の夫を対象とした Husband Abuse 研究において解決するには、可能な限り実際の生活状況を考慮した多面的な下位概念と事象 (調査項目) を基礎に構造化し、それら下位概念の概念的・数量的な加算性 (一次元性) の問題を整理しながら、Husband Abuse と夫の妻に対するネガティブな感情の関係を明らかにしていくことが望まれよう。そのような学術的アプローチであってこそ、研究成果を適切かつ確実に実践に反映させられるものと推察される。

本研究は、多文化家族に対する社会福祉的な介入の指針をえることをねらいに、台湾の多文化家族の夫が日常的に妻から経験する Husband Abuse とそのことに随伴する夫の妻に対するネガティブなストレス認知 (妻に対する否定的感情) との関連性を明らかにすることを目的とした。

## II. 研究方法

本調査研究では、台北市、高雄市、台北県、桃園県に在住する多文化家族の夫を対象とした。調査対象として、著者らは世新大学社会発展研究所等の多文化家族に関係する諸機関の協力を得て、前記地域に在住する多文化家族の夫をランダムに200人抽出した。調査の実施に際し、著者らは調査票の配布と回収を行なったが、あらかじめ調査で得られた内容やプライバシーの保護に留意することを文書で約束し、納得できた夫からのみ回答の上、返送するよう依頼した。

調査内容は属性、Husband Abuseの頻度、妻に対する否定的感情で構成した。そのうちの属性は、夫の現在と結婚時の年齢、宗教、学歴、収入、家族構成、結婚継続期間、妻の現在と結婚時の年齢、国籍、宗教、コミュニケーション能力について質問した。Husband Abuseは、著者らの臨床経験や他の専門家からの聞き取り調査を基礎に7領域で構成し、調査項目は心理的虐待を9項目、言語的暴力を13項目、ネグレクトを6項目、社会的虐待を6項目、性的虐待を6項目、経済的虐待を7項目、身体的暴力を17項目で配置した。Husband Abuseの回答は「まったくない」「時々ある」「しばしばある」で求めたが、数量化は「0点：なし」「1点：時々ある、しばしばある」とした。妻に対する夫の否定的感情は、これまでの著者らの相談経験等を基礎として構成した27項目で測定した。妻に対する夫の否定的感情の回答と得点は、「0点：全くそう感じない」、「1点：少しそう感じる」、「2点：かなりそう感じる」、「3点：とてもそう感じる」とした。

統計解析においては、前記7領域のHusband Abuseそれぞれを独立変数、妻に対する否定的感情を従属変数とする因果関係モデルを仮定し、そのデータへの適合性について検討した。このとき、統制変数として「夫の収入」と「妻のコミュニケーション能力」の2変数を採用した。Husband Abuseに関しては、それらに対する実践的介入が必要か否かに関する資料となりうるように最大限選択して1因子モデルを仮定した。ただし、仮定した1因子モデルがデータに適合しない、換言するなら、各種適合度指標が統計学的に許容範囲にない場合、あるいはパス係数に不適切な数値が観察される場合は、各領域に所属する項目間の相関係数を算出し、その値が0.8以上で類似性が高いと想定される<sup>ついで</sup>対の項目間において、いずれかの項目を任意に選択し、再び、その因子モデルのデータへの適合性を検討した。なお、Husband Abuseの各領域内の項目間の相関係数は四分相関係数(tetrachoric correlation)で求めた。前記の処理においても因子モデルがデータに適合しない場合は、さらに探索的な因子分析を試み、第一因子の因子負荷量ならびに仮定される潜在変数の意味的な側面を考慮して因子所属項目を決定し、その因子構造モデルのデータへの適合性を検討するものとした。このときの判断に用いた因子負荷

量の数値は0.4以上とした。妻に対する否定的感情に関しても、その因子に属する項目の選定は上記と同様の統計処理を行なった。上記処理過程では、あくまでも実際の相談内容を可能な限り反映させることに主眼を置いたものであって、可能な限り適切な少数の項目で構成するといった尺度開発の手法とは異なっていることに留意されたい。

前記の因子構造モデルならびに因果関係モデルのデータへの適合性は、すべて推定法として重み付け最小二乗法を採用し、適合度指標としては Root Mean Square Error Approximation (RMSEA) と Comparative Fit Index (CFI) を採用した。なお、妻に対する否定的感情に関しては、1因子モデルと仮定し、データへの適合性を確認した。推定法は重み付け最小二乗法、項目間の相関係数は多分相関係数 (polychoric correlation) で求めた。

### Ⅲ. 研究結果

#### 1. 属性分布

回収された186人(回収率93.0%)のデータを基礎にするなら(表1)、回答者(夫)の現在の年齢(有効回答:185人,99.5%)は平均43.2歳(標準偏差9.5,範囲28-80歳)、妻の現在の年齢(有効回答:185人,99.5%)は平均32.4歳(標準偏差6.2,範囲21-58歳)であった。また、結婚時の年齢は、夫(有効回答:182人,97.8%)の平均は35.7歳(標準偏差8.9,範囲20-64歳)、妻(有効回答:183人,98.4%)の平均年齢は25.8歳(標準偏差5.7,範囲17-58歳)であった。夫と妻の年齢差は(有効回答:184人,98.9%)、平均10.7歳(標準偏差6.9,範囲-14~31歳)であった。現在の妻との結婚継続期間(有効回答:184人,98.9%)の平均は7.8年(標準偏差4.0,範囲2カ月-22年)であった。

結婚に至った経過の回答分布(有効回答:182人,97.8%)は、上位3位までに着目するなら、「商業的な仲介業者の紹介による結婚」が66人(35.5%)、「台湾で国際結婚している友人の紹介による結婚」が31人(16.7%)、「台湾で働いている家族・親戚の紹介による結婚」が30人(16.1%)の順となっていた。

「夫の月収」の回答分布(有効回答:184人,98.9%)は、「3万-6万NT\$未満」が93人(50.0%)で最も多く、「3万NT\$未満」が44人(23.7%)、「6万-10万NT\$未満」が31人(16.7%)、「収入なし」が10人(5.4%)、「10万-14万NT\$未満」が4人(2.2%)、「17万NT\$以上」が2人(1.1%)の順であった。

妻の国籍の回答分布(有効回答:186人,100.0%)は、上位3位に着目するなら、「ベトナム」が70人(37.6%)、「インドネシア」が39人(21.0%)、「中華人民共和国」が34人(18.3%)の順となっていた。

表 1 対象者の基本的属性

単位：人（%），n = 186

年齢 (夫：n = 185 妻：n = 185)	夫	平均年齢	43.2 歳	標準偏差 範囲	9.5 28～80	最終学歴 (夫)	未就学	1 ( 0.5)	
	妻	平均年齢	32.4 歳	標準偏差 範囲	6.2 21～58		小学校卒業	8 ( 4.3)	
結婚時の年齢 (夫：n = 182 妻：n = 183)	夫	平均年齢	35.7 歳	標準偏差 範囲	8.9 20～64	最終学歴 (妻)	中学校卒業	31 (16.7)	
	妻	平均年齢	25.8 歳	標準偏差 範囲	5.7 17～58		高等学校卒業	76 (40.9)	
夫と妻の年齢差 (n = 184)	平均		10.7 歳	標準偏差 範囲	6.9 -14～31	最終学歴 (妻)	短期大学・専門学校相当の学校の卒業	41 (22.0)	
	平均		7.8 年	標準偏差 範囲	4.0 2 ヶ月～22 年		大学 (4 年制) 卒業	24 (12.9)	
結婚継続期間 (n = 184)	平均		7.8 年	標準偏差 範囲	4.0 2 ヶ月～22 年	最終学歴 (妻)	大学院卒業	5 ( 2.7)	
	平均		7.8 年	標準偏差 範囲	4.0 2 ヶ月～22 年		無回答	2 ( 1.1)	
結婚に至った 経路	商業的な仲介業者の紹介による結婚		66 (35.5)			家族構成	夫婦だけ	25 (13.4)	
	宗教団体の紹介による結婚		4 ( 2.2)				夫婦と子ども	90 (48.4)	
	台湾で働いている家族・親戚の紹介による結婚		30 (16.1)				夫婦と子どもと夫婦の兄弟姉妹	12 ( 6.5)	
	台湾で国際結婚している友人の紹介による結婚		31 (16.7)				夫婦と子どもと義父母 (義父母のいずれでも可)	26 (14.0)	
	外国人労働者として台湾に滞在し日常生活での恋愛で結婚		28 (15.1)				夫婦と子どもと自分の親 (父母のいずれでも可)	16 ( 8.6)	
	その他		4 ( 2.2)				夫婦と子どもと自分の親と夫婦の兄弟姉妹	13 ( 7.0)	
夫の月収	3 万 NT \$ 未満		44 (23.7)			妻のコミュニケーション 能力	理解能力	少しは分かる	15 ( 8.1)
	3 万～6 万 NT \$ 未満		93 (50.0)				だいたい分かる	68 (36.6)	
	6 万～10 万 NT \$ 未満		31 (16.7)				よく分かる	102 (54.8)	
	10 万～14 万 NT \$ 未満		4 ( 2.2)				無回答	1 ( 0.5)	
	17 万 NT \$ 以上		2 ( 1.1)				読む能力	気楽に話せない	2 ( 1.1)
	収入なし		10 ( 5.4)					少しは気楽に話せる	20 (10.8)
無回答		2 ( 1.1)			会話能力	だいたい気楽に話せる		73 (39.2)	
					気楽に話せる	90 (48.4)			
					無回答	1 ( 0.5)			
					まったく読めない	23 (12.4)			
夫の宗教	仏教		90 (48.4)			書く能力	少しは読める	77 (41.4)	
	統一教会		2 ( 1.1)				だいたい読める	53 (28.5)	
	道教		53 (28.5)				よく読める	33 (17.7)	
	カトリック		12 ( 6.5)				妻の国籍	中華人民共和国	34 (18.3)
	プロテスタント		8 ( 4.3)					ベトナム国	70 (37.6)
	東方諸教会		1 ( 0.5)					日本国	11 ( 5.9)
イスラム教		2 ( 1.1)			韓国	3 ( 1.6)			
その他		2 ( 1.1)			フィリピン	15 ( 8.1)			
なし		14 ( 7.5)			タイ国	14 ( 7.5)			
無回答		2 ( 1.1)			インドネシア	39 (21.0)			
妻の宗教	仏教		79 (42.5)			妻の国籍	中華人民共和国	34 (18.3)	
	統一教会		2 ( 1.1)				ベトナム国	70 (37.6)	
	道教		10 ( 5.4)				日本国	11 ( 5.9)	
	カトリック		26 (14.0)				韓国	3 ( 1.6)	
	プロテスタント		8 ( 4.3)				フィリピン	15 ( 8.1)	
	ギリシャ正教		1 ( 0.5)				タイ国	14 ( 7.5)	
東方諸教会		1 ( 0.5)			インドネシア	39 (21.0)			
イスラム教		17 ( 9.1)							
ヒンドゥー教		2 ( 1.1)							
その他		2 ( 1.1)							
なし		38 (20.4)							

夫と妻の宗教は、上位 3 位までに着目するなら、夫（有効回答：184 人，98.9%）は「仏教」が 90 人（48.4%）、「道教」が 53 人（28.5%）、「宗教なし」が 14 人（7.5%）で、妻（有効回答：549 人，94.7%）は「仏教」が 79 人（42.5%）、「宗教なし」が 38 人（20.4%）、「カトリック」が 26 人（14.0%）であった。

夫と妻の最終学歴は、第一位に着目するなら、夫（有効回答：186 人，100.0%）は「高校卒業」が 76 人（40.9%）と最も多く、妻（有効回答：184 人，98.9%）は「高校卒業」が 80 人（43.0%）であった。

「妻のコミュニケーション能力」は、「よく分かる」に着目するなら、理解能力（有効

回答：185人、99.5%）は102人（54.8%）、会話能力（有効回答：185人、99.5%）は90人（48.4%）、読む能力（有効回答：186人、100.0%）は33人（17.7%）、書字能力（有効回答：186人、100.0%）は29人（15.6%）であった。なお、これら4項目を1因子とする因子モデルのデータへの適合性（有効回答：181人）は、理解能力と会話能力間の誤差相関を結んだところ、CFIが1.000、RMSEAが0.000で、統計学的に有意な水準を満たしていた。

家族構成（有効回答：185人、99.5%）は、上位3位までに着目するなら、「夫婦と子ども」が90人（48.4%）、「夫婦と子どもと義父母（義父母のいずれでも可）」が26人（14.0%）、「夫婦だけ」が25人（13.4%）の順となっていた。

## 2. 夫の妻に対する否定的感情の因子モデルのデータへの適合性

夫の収入、妻のコミュニケーション能力、ならびに妻に対する否定的感情に欠損値をもたない回答者161人の妻に対する否定的な感情に関する回答分布は表2に示した。

妻に対する否定的感情に関連する27項目で構成した1因子モデルのデータへの適合性は（有効回答者161人）、CFIが0.916、RMSEAが0.224と統計学的な許容水準を十分

表2 夫の妻に対する否定的感情に関する回答分布

単位：人（%），n=161

質問項目	回答カテゴリ			
	全くそう感じない	少しそう感じる	かなりそう感じる	とてもそう感じる
Y1 妻の言動（ふるまい）が理解できず不愉快になる	74(46.0)	45(28.0)	32(19.9)	10( 6.2)
Y2 理由もなく、突然、妻に怒りをぶつけたくなる	122(75.8)	29(18.0)	6( 3.7)	4( 2.5)
Y3 妻がそばにただでいるだけで気分が悪くなる	139(86.3)	16( 9.9)	5( 3.1)	1( 0.6)
Y4 妻は私にほとんど関心がなくて寂しい	128(79.5)	28(17.4)	3( 1.9)	2( 1.2)
Y5 妻は親身に悩みを聞いてくれないので悲しい	127(78.9)	23(14.3)	5( 3.1)	6( 3.7)
Y6 妻との性生活が厭わしい	146(90.7)	12( 7.5)	0( 0.0)	3( 1.9)
Y7 意見が衝突するので妻との会話は楽しくない	32(19.9)	57(35.4)	47(29.2)	25(15.5)
Y8 妻は気分のムラが激しくて気持ちが落ち着かない	120(74.5)	30(18.6)	7( 4.3)	4( 2.5)
Y9 妻からの身体的な暴力に恐怖を感じる	152(94.4)	6( 3.7)	1( 0.6)	2( 1.2)
Y10 妻の罵詈雑言（悪口）のために心が痛くなる	118(73.3)	33(20.5)	7( 4.3)	3( 1.9)
Y11 妻は私の要求をほとんど拒否するので腹が立つ	138(85.7)	18(11.2)	2( 1.2)	3( 1.9)
Y12 妻は私を理解してくれないので悲しい	107(66.5)	46(28.6)	5( 3.1)	3( 1.9)
Y13 妻の過干渉には疲れる	110(68.3)	43(26.7)	6( 3.7)	2( 1.2)
Y14 妻は私を夫として読めないのが悔しい	153(95.0)	6( 3.7)	1( 0.6)	1( 0.6)
Y15 妻は私を信じてくれないので悲しい	120(74.5)	37(23.0)	3( 1.9)	1( 0.6)
Y16 韓国語をきちんと覚えてないので妻に腹が立つ	143(88.8)	13( 8.1)	2( 1.2)	3( 1.9)
Y17 妻の料理がおいしくないのが食欲が減退する	146(90.7)	10( 6.2)	4( 2.5)	1( 0.6)
Y18 妻が料理の手抜きをするので腹が立つ	130(80.7)	24(14.9)	5( 3.1)	2( 1.2)
Y19 妻は家事や整理整頓が下手なのでイライラする	119(73.9)	30(18.6)	11( 6.8)	1( 0.6)
Y20 妻の無駄遣いが荒くて腹が立つ	118(73.3)	37(23.0)	4( 2.5)	2( 1.2)
Y21 妻は気が利かないので他人に紹介するのが恥ずかしい	155(96.3)	5( 3.1)	0( 0.0)	1( 0.6)
Y22 妻は自分にやさしくないで、さびしい気持ちになる	146(90.7)	13( 8.1)	0( 0.0)	2( 1.2)
Y23 妻は文句（小言）ばかり言うので、頭がいたい	108(67.1)	36(22.4)	8( 5.0)	9( 5.6)
Y24 妻が過ぎたことをいつまでも蒸し返すので、怒鳴りたくなる	117(72.7)	28(17.4)	11( 6.8)	5( 3.1)
Y25 妻は言われている意味が分かっていないのに、自分が不利になると分からないふりをするので腹が立つ	113(70.2)	20(12.4)	18(11.2)	10( 6.2)
Y26 妻が私の両親に対して気遣いをしないので気分が悪い	87(54.0)	39(24.2)	30(18.6)	5( 3.1)
Y27 妻が私の両親と一緒に生活することをいやがっているため腹が立つ	95(59.0)	28(17.4)	32(19.9)	6( 3.7)

に満たさなかった。そこで、多分相関係数を算出し相関係数の値が0.8を超えていた「Y4：妻は私にほとんど関心がないので寂しい」と「Y5：妻は親身に悩みを聞いてくれないので悲しい」, 「Y4：妻は私にほとんど関心がないので寂しい」と「Y12：妻は私を理解してくれないので悲しい」などがあり、いずれかの項目を任意に選定し、20項目で1因子を構成したが、その因子モデルの適合度はCFIが0.909、RMSEAが0.107と統計学的な許容水準を十分満たしていなかった。そこでさらに前記の20項目を用いて探索的分析を行い、任意に因子負荷量の数値を基礎に選択した13項目で1因子を構成したところ、その因子モデルはデータに適合した（CFIが0.964、RMSEAが0.075で、パス係数に異常値は観察されなかった）。このとき選択された13項目の内訳は、「Y2：理由もなく、突然、妻に怒りをぶつけたくなる」「Y3：妻がそばにいてだけで気分が悪くなる」「Y5：妻は親身に悩みを聞いてくれないので悲しい」「Y6：妻との性生活が厭わしい」「Y8：妻は気分のムラが激しくて気持ちが落ち着かない」「Y9：妻からの身体的な暴力に恐怖を感じる」「Y10：妻の罵詈雑言（悪口）のために心が痛くなる」「Y12：妻は私を理解してくれないので悲しい」「Y13：妻の過干渉には疲れる」「Y15：妻は私を信じてくれないので悲しい」「Y17：妻の料理がおいしくないので食欲が減退する」「Y20：妻の無駄遣いが荒くて腹が立つ」「Y22：妻は自分にやさしくないで、さびしい気持ちになる」である。

### 3. Husband Abuse と夫の妻に対する否定的感情の関係

#### 1) 妻からの心理的虐待と夫の妻に対する否定的感情の関係

夫の収入、妻のコミュニケーション能力、ならびに妻からの心理的虐待に欠損値をもたない回答者における妻からの心理的虐待に関する回答分布（有効回答者177人）は表3に示した。

妻からの心理的虐待に関連する9項目で構成した1因子モデルのデータへの適合性は、CFIが0.971、RMSEAが0.077と統計学的な許容水準を十分に満たしていたが、パ

表3 心理的虐待に関する回答分布

単位：人（%），n=177

質問項目	回答カテゴリ		
	これまで全くない	希になる	時々ある
Xa1 私の言うことはどんなことも信じない	57(32.2)	99(55.9)	21(11.9)
Xa2 私が何を言おうと自分には関係ないという態度をとる	101(57.1)	61(34.5)	15( 8.5)
Xa3 私の要求を絶対に認めない	132(74.6)	40(22.6)	5( 2.8)
Xa4 私の身体の不調や健康上の訴えを無視する	152(85.9)	19(10.7)	6( 3.4)
Xa5 私を家庭の意思決定から意図的にはずす	159(89.8)	12( 6.8)	6( 3.4)
Xa6 私が謝っても許さない	132(74.6)	33(18.6)	12( 6.8)
Xa7 長時間、ときには何日も私を無視する	142(80.2)	29(16.4)	6( 3.4)
Xa8 私に心理的なダメージになる屈辱的なことを繰り返す	130(73.4)	36(20.3)	11( 6.2)
Xa9 (自分が間違っている)私に対して自分の誤りは認めない	119(67.2)	39(22.0)	19(10.7)

ス係数から異常値が観察された。そこで、四分相関係数を算出し相関係数の値が0.8を超えていた「私の要求を絶対に認めない」と「私を家庭の意思決定から意図的にはずす」、「私を家庭の意思決定から意図的にはずす」と「長時間、ときには何日も私を無視する」などがあり、いずれかの項目を任意に選定し、7項目で1因子を構成したところ、その因子モデルはデータに適合した（CFIが0.990、RMSEAが0.040で、パス係数に異常値は観察されなかった）。

妻からの心理的虐待を7項目で構成し、その1因子モデルを独立変数、妻に対する否定的感情を従属変数とする単回帰モデルは（有効回答者165人）、データに適合した（表4）。妻からの心理的虐待から妻に対する否定的感情に向かうパス係数は0.597で、統計学的に有意な水準にあった。このことは妻から心理的虐待を受けている夫ほど、妻に対する否定的感情が強いことを意味している。なお、夫の収入が高いほど妻に対する

表4 領域別にみた Husband Abuse と夫の妻に対する否定的感情の関係

パス	パス係数	R <sup>2</sup>	CFI	RMSEA
心理的虐待→否定的感情	0.597*	0.439		
夫の収入→心理的虐待	-0.171			
妻のコミュニケーション能力→心理的虐待	0.129		0.969	0.053
夫の収入→否定的感情	-0.212*			
妻のコミュニケーション能力→否定的感情	-0.071			
言語的暴力→否定的感情	0.576*	0.431		
夫の収入→言語的暴力	-0.132			
妻のコミュニケーション能力→言語的暴力	0.073		0.959	0.062
夫の収入→否定的感情	-0.251*			
妻のコミュニケーション能力→否定的感情	-0.034			
ネグレクト→否定的感情	0.356*	0.215		
夫の収入→ネグレクト	-0.237			
妻のコミュニケーション能力→ネグレクト	0.020		0.956	0.062
夫の収入→否定的感情	-0.225*			
妻のコミュニケーション能力→否定的感情	0.000			
社会的虐待→否定的感情	0.641*	0.435		
夫の収入→社会的虐待	-0.430			
妻のコミュニケーション能力→社会的虐待	-0.017		0.971	0.055
夫の収入→否定的感情	-0.041			
妻のコミュニケーション能力→否定的感情	0.018			
性的虐待→否定的感情	0.704*	0.559		
夫の収入→性的虐待	-0.142			
妻のコミュニケーション能力→性的虐待	0.237		0.957	0.066
夫の収入→否定的感情	-0.215			
妻のコミュニケーション能力→否定的感情	-0.159			
経済的虐待→否定的感情	0.412*	0.262		
夫の収入→経済的虐待	0.024			
妻のコミュニケーション能力→経済的虐待	0.192*		0.960	0.061
夫の収入→否定的感情	-0.324*			
妻のコミュニケーション能力→否定的感情	-0.071			
身体的虐待→否定的感情	0.496*	0.329		
夫の収入→身体的虐待	-0.233			
妻のコミュニケーション能力→身体的虐待	0.112		0.959	0.052
夫の収入→否定的感情	-0.199*			
妻のコミュニケーション能力→否定的感情	-0.051			

\*p<0.05



否定的感情が低い傾向が支持されたが、その寄与率は小さなものであった。

## 2) 言語的暴力と夫の妻に対する否定的感情の関係

夫の収入、妻のコミュニケーション能力、ならびに妻からの言語的暴力に欠損値をもたない回答者における妻からの言語的暴力に関する回答分布（有効回答者 173 人）は表 5 に示した。

妻からの言語的暴力に関連する 13 項目で構成した 1 因子モデルのデータへの適合性は、CFI が 0.969, RMSEA が 0.061 と統計学的な許容水準を十分に満たしていた。

妻からの言語的暴力を 13 項目で構成し、その 1 因子モデルを独立変数、妻に対する否定的感情を従属変数とする単回帰モデルは（有効回答者 162 人）、データに適合した（表 4）。妻からの言語的暴力から妻に対する否定的感情に向かうパス係数は 0.576 で、統計学的に有意な水準にあった。このことは妻から言語的暴力を受けている夫ほど、妻に対する否定的感情が強いことを意味している。なお、夫の収入が高いほど妻に対する否定的感情が低い傾向が支持されたが、その寄与率は小さかった。

## 3) ネグレクトと夫の妻に対する否定的感情の関係

夫の収入、妻のコミュニケーション能力、ならびに妻からのネグレクトに欠損値をもたない回答者における妻からのネグレクトに関する回答分布（有効回答者 175 人）は表 6 に示した。

妻からのネグレクトに関連する 6 項目で構成した 1 因子モデルのデータへの適合性は、CFI が 1.000, RMSEA が 0.000 と統計学的な許容水準を十分に満たしていた。

妻からのネグレクトを 6 項目で構成し、その 1 因子モデルを独立変数、妻に対する否定的感情を従属変数とする単回帰モデルは（有効回答者 163 人）、データに適合した（表 4）。妻からのネグレクトから妻に対する否定的感情に向かうパス係数は 0.356 で、統計学的に有意な水準にあった。このことは妻からネグレクトをされている夫ほど、妻

表 5 言語的暴力に関する回答分布

単位：人（%），n = 173

質問項目	回答カテゴリ		
	これまで 全くない	希になる	時々ある
Xb 1 私に死を意識させるような言葉（死ね、殺すぞ）を用いる	155 (89.6)	16 ( 9.2)	2 ( 1.2)
Xb 2 私に家から出て行け（別れる）と恫喝する	125 (72.3)	32 (18.5)	16 ( 9.2)
Xb 3 私を口汚く（馬鹿とか豚）罵る	137 (79.2)	32 (18.5)	4 ( 2.3)
Xb 4 私を大声で怒鳴る	131 (75.7)	35 (20.2)	7 ( 4.0)
Xb 5 私を無能で役立たずなどと侮辱（あるいは馬鹿に）する	137 (79.2)	26 (15.0)	10 ( 5.8)
Xb 6 私と別れるなら死んでやる（あるいは自殺する）とウソをつく	165 (95.4)	6 ( 3.5)	2 ( 1.2)
Xb 7 私に子どもや身内を殺すなどと脅す	169 (97.7)	2 ( 1.2)	2 ( 1.2)
Xb 8 私を侮辱的な言葉で呼ぶ	124 (71.7)	40 (23.1)	9 ( 5.2)
Xb 9 私の欠点や癖を指摘して笑いにする	106 (61.3)	58 (33.5)	9 ( 5.2)
Xb 10 自分の浮気について私に話す	165 (95.4)	6 ( 3.5)	2 ( 1.2)
Xb 11 私の自尊心を傷つける	102 (59.0)	52 (30.1)	19 (11.0)
Xb 12 私の国の歴史や伝統、信じていること、価値観を否定する	138 (79.8)	33 (19.1)	2 ( 1.2)
Xb 13 私が最悪感をもつような言葉を繰り返す	146 (84.4)	20 (11.6)	7 ( 4.0)

表6 ネグレクトに関する回答分布

単位：人（％），n = 175

質問項目	回答カテゴリ		
	これまで 全くない	希になる	時々ある
Xc 1 私が病院で治療を受けなければならない状態でも病院に行かせない	165 (94.3)	6 ( 3.4)	0 ( 0.0)
Xc 2 私の食事の回数を減らしたり、食事を抜いたりする	153 (87.4)	22 (12.6)	0 ( 0.0)
Xc 3 経済的なゆとりができて私が欲しがるものは買い与えない	149 (85.1)	23 (13.1)	3 ( 1.7)
Xc 4 私が必要な衣類や暖房器具を提供しない	167 (95.4)	8 ( 4.6)	0 ( 0.0)
Xc 5 私に散発の機会を与えない	171 (97.7)	2 ( 1.1)	2 ( 1.1)
Xc 6 私を家に放置して、数日間連絡もせずに、家に戻ってこない	149 (85.1)	19 (10.9)	7 ( 4.0)

表7 社会的虐待に関する回答分布

単位：人（％），n = 176

質問項目	回答カテゴリ		
	これまで 全くない	希になる	時々ある
Xd 1 私に近所づきあいを禁止する	166 (94.3)	10 ( 5.7)	0 ( 0.0)
Xd 2 私の人間関係や交友関係を細かくチェックする	145 (82.4)	26 (14.8)	5 ( 2.8)
Xd 3 電話や手紙の発信者及び内容を私に執拗に問いただす	161 (91.5)	10 ( 5.7)	5 ( 2.8)
Xd 4 私に自由な外出を認めない (妨害する)	159 (90.3)	16 ( 9.1)	1 ( 0.6)
Xd 5 私の行動を終始、監視する	152 (86.4)	22 (12.5)	2 ( 1.1)
Xd 6 他人の前で私の欠点をあげつらう	100 (56.8)	43 (24.4)	33 (18.8)

に対する否定的感情が強いことを意味している。なお、夫の収入が高いほど妻に対する否定的感情が低い傾向が支持されたが、その寄与率は小さかった。

#### 4) 社会的虐待と夫の妻に対する否定的感情の関係

夫の収入、妻のコミュニケーション能力、ならびに妻からの社会的虐待に欠損値をもたない回答者における妻からの社会的虐待に関する回答分布（有効回答者 176 人）は表 7 に示した。

妻からの社会的虐待に関連する 6 項目で構成した 1 因子モデルのデータへの適合性は、CFI が 0.988、RMSEA が 0.070 と統計学的な許容水準を十分に満たしていた。

妻からの社会的虐待を 6 項目で構成し、その 1 因子モデルを独立変数、妻に対する否定的感情を従属変数とする単回帰モデルは（有効回答者 164 人）、データに適合した（表 4）。妻からの社会的虐待から妻に対する否定的感情に向かうパス係数は 0.641 で、統計学的に有意な水準にあった。このことは妻から社会的虐待を受けている夫ほど、妻に対する否定的感情が強いことを意味する。なお、夫の収入と妻のコミュニケーション能力はいずれの変数に対しても統計学的に有意な関係は認められなかった。

#### 5) 性的虐待と夫の妻に対する否定的感情の関係

夫の収入、妻のコミュニケーション能力、ならびに妻からの性的虐待に欠損値をもたない回答者における妻からの性的虐待に関する回答分布は（有効回答者 176 人）表 8 に示した。

妻からの性的虐待に関連する 6 項目で構成した 1 因子モデルのデータへの適合性は、

表 8 性的虐待に関する回答分布

単位：人（％），n = 176

質問項目	回答カテゴリ		
	これまで 全くない	希になる	時々ある
Xe 1 私にセックスを強要する	163 (92.6)	12 ( 6.8)	1 ( 0.6)
Xe 2 私が望んでも避妊に協力しない	161 (91.5)	14 ( 8.0)	1 ( 0.6)
Xe 3 妻は妊娠を避ける	170 (96.6)	5 ( 2.8)	1 ( 0.6)
Xe 4 私にポルノを無理矢理に見せる	170 (96.6)	6 ( 3.4)	0 ( 0.0)
Xe 5 私に特別な行為を強要する	165 (93.8)	11 ( 6.3)	0 ( 0.0)
Xe 6 私に対して異常なほどに嫉妬する	96 (54.5)	51 (29.0)	29 (16.5)

CFI が 0.975, RMSEA が 0.051 と統計学的な許容水準を十分に満たしていたが, パス係数から異常値が観察された。そこで, 四分相関係数を算出した結果, 相関係数の値が 0.8 を超えていた項目がなかったことから, 次の段階である探索的因子分析を行った。その結果, 5 項目 1 因子モデルの適合度を確認した。結果は CFI が 1.000, RMSEA が 0.000 と統計学的な許容水準を十分に満たしていたが, パス係数が統計学的な有意水準を満たしていなかった。そこでさらに因子の意味から, 「私に対して異常なほどに嫉妬する」の項目を削除し, 5 項目で 1 因子を構成したところ, その因子モデルはデータに適合した (CFI が 0.923, RMSEA が 0.055 で, パス係数に異常値は観察されなかった)。

妻からの性的虐待を 5 項目で構成し, その 1 因子モデルを独立変数, 妻に対する否定的感情を従属変数とする単回帰モデルは (有効回答者 164 人), データに適合した (表 4)。妻からの性的虐待から妻に対する否定的感情に向かうパス係数は 0.704 で, 統計学的に有意な水準にあった。このことは妻から性的虐待を受けている夫ほど, 妻に対する否定的感情が強いことを意味している。なお, 夫の収入と妻のコミュニケーション能力はいずれの変数に対しても統計学的に有意な関係が認められなかった。

## 6) 経済的虐待と夫の妻に対する否定的感情の関係

夫の収入, 妻のコミュニケーション能力, ならびに妻からの経済的虐待に欠損値をもたない回答者における妻からの経済的虐待に関する回答分布は (有効回答者 177 人) 表 9 に示した。

妻からの経済的虐待に関連する 7 項目で構成した 1 因子モデルのデータへの適合性

表 9 経済的虐待に関する回答分布

単位：人（％），n = 177

質問項目	回答カテゴリ		
	これまで 全くない	希になる	時々ある
Xf 1 私にお金を持たさない	163 (92.1)	10 ( 5.6)	4 ( 2.3)
Xf 2 私の同意や許可なしに所持品を棄てる	127 (71.8)	38 (21.5)	12 ( 6.8)
Xf 3 私が預けたお金や物を返さない	133 (75.1)	32 (18.1)	12 ( 6.8)
Xf 4 私が持っている宝石など価値のあるものを無断に売る	171 (96.6)	3 ( 1.7)	3 ( 1.7)
Xf 5 私の同意や許可なしに財産を処分する	172 (97.2)	4 ( 2.3)	1 ( 0.6)
Xf 6 家計費を勝手に使う	96 (54.2)	50 (28.2)	31 (17.5)
Xf 7 私に相談せずに借金する	167 (94.4)	9 ( 5.1)	1 ( 0.6)

は、CFI が 0.950, RMSEA が 0.096 と RMSEA がやや統計学的な許容水準を満たしてはなかった。そこで四分相関係数を算出し、相関係数の値が 0.8 以上となっている項目「私が預けたお金や物を返さない」と「家計費を勝手に使う」、「私が持っている宝石など価値のあるものを無断に売る」と「私の同意や許可なしに財産を処分する」があり、いずれかの項目を任意に選定し、5 項目で 1 因子を構成したところ、その因子モデルはデータに適合した (CFI が 1.000, RMSEA が 0.000 で、パス係数に異常値は観察されなかった)。

妻からの経済的虐待を 5 項目で構成し、その 1 因子モデルを独立変数、妻に対する否定的感情を従属変数とする単回帰モデルは (有効回答者 165 人)、データに適合した (表 4)。妻からの経済的虐待から妻に対する否定的感情に向かうパス係数は 0.412 で、統計学的に有意な水準にあった。このことは妻から経済的虐待を受けている夫ほど、妻に対する否定的感情が強いことを意味している。なお、妻のコミュニケーション能力が高いほど経済的虐待を受けやすく、夫の収入が高いほど妻に対する否定的感情が低い傾向が支持されたが、その寄与率は小さかった。

## 7) 身体的暴力と夫の妻に対する否定的感情の関係

夫の収入、妻のコミュニケーション能力、ならびに妻からの身体的暴に欠損値をもたない回答者における妻からの経済的虐待に関する回答分布は (有効回答者 175 人) 表 10 に示した。

妻からの身体的暴に関連する 17 項目で構成した 1 因子モデルのデータへの適合性を確認した結果、CFI が 0.981, RMSEA が 0.025 と統計学的な許容水準を十分に満たしていた。

表 10 身体的暴力に関する回答分布

単位：人 (%), n = 175

質問項目	回答カテゴリ		
	これまで全くない	希になる	時々ある
Xg 1 私がいやがる仕事を強要する	136(77.7)	34(19.4)	5( 2.9)
Xg 2 私を部屋に閉じ込める	174(99.4)	1( 0.6)	0( 0.0)
Xg 3 妻は私を爪で引っかく	129(73.7)	41(23.4)	5( 2.9)
Xg 4 私にものをぶつける	128(73.1)	35(20.0)	12( 6.9)
Xg 5 私を足で蹴る	158(90.3)	16( 9.1)	1( 0.6)
Xg 6 私をげんこつで頭や顔を殴る	168(96.0)	7( 4.0)	0( 0.0)
Xg 7 私を突き飛ばす	150(85.7)	20(11.4)	5( 2.9)
Xg 8 私の髪の毛を強く引っ張る	166(94.9)	5( 2.9)	4( 2.3)
Xg 9 私をつねる	128(73.1)	31(17.7)	16( 9.1)
Xg 10 私を引きずり回す	172(98.3)	2( 1.1)	1( 0.6)
Xg 11 私にお茶や水をかける	163(93.1)	9( 5.1)	3( 1.7)
Xg 12 私に煙草の火を押し付ける	173(98.9)	2( 1.1)	0( 0.0)
Xg 13 私に唾を吐きかける	169(96.6)	6( 3.4)	0( 0.0)
Xg 14 私を押さえつける	165(94.3)	8( 4.6)	2( 1.1)
Xg 15 壁を叩いたりテーブルをひっくり返して私に力を見せつける	166(94.9)	7( 4.0)	2( 1.1)
Xg 16 私の首を締める	164(93.7)	8( 4.6)	3( 1.7)
Xg 17 私をものを使って殴る	158(90.3)	16( 9.1)	1( 0.6)

妻からの身体的暴を 17 項目で構成し、その 1 因子モデルを独立変数、妻に対する否定的感情を従属変数とする単回帰モデルは（有効回答者 163 人）、データに適合した（表 4）。妻からの身体的暴から妻に対する否定的感情に向かうパス係数は 0.496 で、統計学的に有意な水準にあった。このことは妻から身体的虐待を受けている夫ほど、妻に対する否定的感情が強いことを意味している。また、統計学的には夫の収入が短いほど妻に対する否定的感情は低い傾向が支持されたものの、その寄与率は小さかった。

#### IV. 考 察

家族形成<sup>(6)</sup>を目的とした移民は、1) 家族のうちの誰かが先に他国に移民し、家族員がその後に家族統合のために移民するパターン<sup>(7)</sup>、2) 比較的経済的規模が大きく労働市場が豊かな国に移民して働いていた男性の妻となって家族形成することを目的に、男性の出身国の若い女性が（多くの場合組織的に）移民するパターン<sup>(8)~(10)</sup>、3) 所属する国家は異なるが、男女が配偶者となることを目的に男女どちらかの出身国もしくは第三国に移民するパターン<sup>(11)~(13)</sup>が認められる。最近、東アジア圏（韓国、台湾、日本）は、結婚総数に占める国際結婚移民女性の割合が急増している。特に、中華人民共和国、モンゴル、ベトナム、フィリピン、タイ、カンボジア等の地域から多くの女性を「ニュー・カマー」として、一方では農村地域の嫁不足を契機として受け入れ、また他方では都市部未婚男性の顕在化が引き金となって受け入れてきたことに特徴がある。従来の研究に着目するなら、東アジア 3 地域のうちの多文化家族形成の先進国と位置づけられる日本<sup>(14)</sup>では、1980 年代は、多くの女性が東南アジアや韓半島、中国本土から日本男性と結婚するためにやってきたことから、「国際結婚」の実態把握とその是非論、女性の人権、農村の前近代的なイエ制度への疑問の提示など、批判的な立場からの議論が中心的課題となっていた。ただし 1990 年代は、行政が仲介して国際結婚に政策的に取り組んだ山形県最上地域における住民意識調査報告書に限られている。2000 年代にはそれらに加えてエスニシティーや多文化共生、国際的な人の移動が中心課題となっていた。他方、韓国の研究では、最近 10 年間に研究が集中しており、国際結婚移民女性を対象とした実証的な研究<sup>(15)~(19)</sup>は認められるものの、その多くは実態報告の繰り返しにとどまり、結婚移民女性は家族というプライベートな空間で経済的期待の喪失、意思疎通の混乱、言語や文化的差異、子供の出産と育児の問題、夫婦の葛藤と暴力、社会的支援体系の不足、社会的偏見と差別、韓国社会の法律と制度に関する認識不在等の問題に直面していることを指摘している。なお、従来の移民女性に関連した虐待あるいは家庭内暴力に関する研究に着目するなら、それは労働移民女性<sup>(20)</sup>、一世の移民世帯の妻<sup>(21)~(32)</sup>、国際結婚移民女性<sup>(3)~(5)</sup>を対象に研究が進められてきている。それらの研究

に共通している研究方法は、事例と聞き取り調査である。従って、どのような虐待をどのような頻度で受けているか、またそれはどのような原因やアウトカムとどの程度関係しているかは言及していない。多文化家族であろうとなかろうと、夫婦といった個人的で親密な関係においても暴力は許されない、時には、それが犯罪行為に相当することもあり得ることに異存はなかろうが、通常、家庭暴力は男女双方の一連の争いの中で発生しやすいものと推察される。このような理由から、本研究では、多文化家族の夫が日常的に妻から経験する Husband Abuse の頻度（潜在的ストレス）と彼らの妻に対する否定的感情（ストレス認知）との関連性を明らかにすることを目的に行なった。なお、統計解析には構造方程式モデリングを採用した。それは因果関係等のモデルの構成力が柔軟で、かつ測定誤差の分離が可能であり、さらには複数の適合度指標によって因果関係モデルの適切さのアセスメントができることに利点がある。

統計解析の結果、本研究において7種類で構成した Husband Abuse はいずれも夫の妻に対する否定的な感情と密接に関係することが明らかとなった。このとき、統制変数として夫婦間の年齢差と件婚継続期間を投入したが、それらは Husband Abuse や妻に対する否定的な感情に大きな影響を有していなかった。具体的には、台湾における多文化家族の Husband Abuse の妻に対する否定的感情に対するパス係数は、「性的虐待」が 0.704, 「社会的虐待」が 0.641, 「心理的虐待」が 0.597, 「言語的暴力」が 0.576, 「身体的虐待」が 0.496, 「経済的虐待」が 0.412, 「ネグレクト」が 0.358 となることを示していた。本来、虐待は人権侵害であり人間の尊厳性を否定する、あってはならない行為であるが、現実には存在が否定できず、それは高いパス係数と関連する虐待ほど、それを被るなら夫にとって妻に対する否定的な感情を引き起こすリスクが高いことを意味している。なお従来、Husband Abuse を潜在的ストレス、妻に対する夫の否定的な感情をストレス認知として位置づけ、それらの関係を吟味した研究はほとんど見あたらない。しかし、本研究で仮定した因果関係の解析の結果は、理論との関係で言うなら、ラザルスが提唱しているストレス認知理論<sup>(33)</sup>を支持するものであった。また上記の結果は、他方では、Husband Abuse は夫の妻に対するネガティブな感情に大きな影響力を持っており、従って、多文化家族にあってより円満な家庭環境を整備するには、Husband Abuse を早急に予防するための介入の必要性を示唆しているものと言えよう。しかも従来の研究は、ネガティブなストレス認知は、たとえば介護者にあっては高齢者虐待<sup>(34)~(36)</sup>、母親にあっては児童虐待<sup>(37)~(38)</sup>と密接に関連することを指摘している。このような知見に従うなら、夫の妻に対する否定的な感情は、さらに妻に対する虐待や児に対する虐待に繋がるリスクを有していることを示唆するものであって、喫緊に専門家が介入することで解決すべき課題であり、多文化家族にあっては家庭内で発生する虐待の悪循環を断ち切ることが強く望まれよう。たとえば、韓国では<sup>(39)</sup>2002年12月、「家庭

暴力犯罪の処罰等に関する特例法」(以下、「特例法」)の改正法案を可決している。また韓国では、1983年に民間女性団体の「女性の電話」が設立され、国内で初めて家庭暴力に関する調査を実施し、シェルターを開設するなど、家庭暴力の問題に取り組みが具体的に動き出した経緯がある。その後、長年虐待を受けてきた妻が夫を殺害する事件が相次ぎ、「女性の電話」などの女性団体は、被告の減刑を求める活動を繰り返し、同時に、DV防止法の制定を推進する運動を積極的に展開してきている。その努力は、家庭暴力の加害者に対する刑事手続きの特例を定めた特例法と、家庭暴力の防止と被害者に対する福祉政策を定めた「家庭暴力防止及び被害者保護等に関する法律」(以下、「保護法」)が1997年12月に制定され、ともに1998年7月1日から施行された。しかし、保護法に基づいて運営されている全国の家庭暴力専門の相談機関に寄せられる相談件数は、それらの法律の制定後も年々増加する傾向にある。また件数の増加だけでなく、刃物で刺す、首を絞める、空気銃で撃つといった暴力の凶悪化も問題となり、2002年の改正は被害者の保護にポイントが置かれた。この改正では主に、(1)法律の目的、(2)応急措置、(3)家庭暴力の加害者が、被害者への接近禁止等の臨時措置に違反した場合の措置、(4)家庭暴力が発生した家庭の児童の教育担当者等の秘密厳守、(5)保護処分等に関する検事の請求権等に関する規定が改正された。特に(3)の改正前の第8条によれば、検事は、暴力行為の制止等の応急措置にもかかわらず、家庭暴力が再発する恐れがある場合は、家庭暴力の加害者に対して、被害者の住居等からの隔離又は100m以内の接近禁止等の臨時措置を裁判所に請求できるものの、加害者がこの臨時措置に違反した場合の措置はなかった。そのため、これまでの第8条の条文を第8条第1項とし、新たに臨時措置に違反した加害者に対する措置について定めた第2項及び第3項を追加している。たとえば、加害者が臨時措置に違反して家庭暴力が再発する恐れがある場合は、加害者を警察の留置場や拘置所に留置するよう、検事は職権又は司法警察官の申請に基づいて、裁判所に請求することができる(第8条第2項)となっている。さらに2003年2月、韓国警察庁は「家庭暴力事件処理警察官用マニュアル」を各警察署に配布し、今後、家庭暴力が発生した場合は、家人がドアを開けなくても、公権力を行使して家宅に入るなど、積極的に介入する方針を明らかにしている。このような経緯があったにせよ、多文化家族の家庭暴力に関連して大きな改善がなされたとは言い難く、また多文化家族の家庭暴力の問題は夫婦ともに関連する事項であるとする指摘はなされてこなかった。しかし、本研究の結果では、家庭暴力は夫から妻へという方向のみならず、妻から夫へという方向も無視できない状況にあることが示唆された。従って、今後は多文化家族で発生する家庭暴力に関して、さらなる研究の蓄積が望まれるところである。本研究の結果が示していたように、夫が妻から受ける虐待は夫の妻に対するネガティブな感情と関連していたことから、そのストレス認知を回避するために、逆に、夫が妻に

対して虐待すると言ったリスクを有している。このような悪循環を未然に防ぐには、多文化家族への家庭暴力に関する情報提供を夫婦を対象に提供すること、また被害を受けた場合の安全性を確保するための方策に関するより具体的なシミュレーション・モデルを情報として提供していくこと、ならびに被害を加えるあるいは受けるリスクが高い者を抽出できるスクリーニング方法の開発が望まれよう。

以上、本研究では、夫の妻から受ける虐待が、妻に対するネガティブな感情に密接に関係しており、それは理論との関係で言うなら、ラザルスのストレス認知理論を支持するものであった。多文化家族に対して専門的な介入方法の開発が急がれるものと推察された。

#### 参考文献

- (1) 内政部入出国及移民署 (2007) 「各縣市外籍配偶人数按国籍分与大陸 (含港澳) 配偶人数」 (内部統計資料)
- (2) 施昭雄, 陳俊良, 許詩屏, 桂田愛 (2007) 「台湾における外国籍及び中国大陸籍配偶者の現状と展望」 『福岡大学研究部論集』 A, 6(6), pp.1-16.
- (3) Tan J, Davidson G. (1994) : Filipina-Australian marriage : Further perspective on spousal violence. *Australian Journal of Social Issues*, 29(3), pp.265-282.
- (4) Woelz-Stirling NA, Kelahe M, Manderson L. (1998) : Power and the Politics of Abuse. *Health Care for Women International*, 19, pp.289-301.
- (5) 松本祐子 (2004) 「国際結婚とドメスティック・バイオレンス—アジア系外国人女性の事例を中心に—」 『聖徳大学研究紀要人文学部』 15, pp.55-62.
- (6) 石井加世子 (2004) 「再生産労働力としての国境を越えた人の移動—既存研究のまとめ—」 『NUCB Journal of Economics and Information Science』 49(2), pp.397-409.
- (7) Kafman, E. (1999) : Female 'Birds of Passage' a Decade Later : Gender and Immigration in the European Union. *International Migration Review*, 33(2), pp.269-299.
- (8) Ko-Li Chin (1994) : Out-of-town brides : international marriage and wife abuse among Chinese immigrants. *Journal of Comparative Family Studies*, 25, pp.53-70.
- (9) Alicea, M. (1997) : "A Chambered Nautilus" : The Contradictory Nature of Puerto Rican Women's Role in the Social Construction of a Transnational Community. *Gender and Society*, pp.597-626.
- (10) Lievens, J. (1999) : Family-forming migration from turkey and Morocco to Belgium : The demand for marriage partners from the countries of origin. *International Migration Review*, 33(3), pp.717-744.
- (11) Truong T-d. (1996) : Gender, international migration and social reproduction : implications for theory, policy, research and networking. *Asian Pac Migr J*. 1996 ; 5(1), pp.27-52.
- (12) Hong-zen Wang and Shu-ming Chang (2002) : The Commodification of International Marriages : Cross-border Marriage Business in Taiwan and Viet Nam. *International Migration*, pp.93-116.
- (13) Gorny, A. and Kpiska, E. (2004) : Mixed marriages in migration from the Ukraine to Poland. *Journal of Ethnic and Migration Studies*, 30(2), pp.353-372.
- (14) 武田里子 (2006) 「新潟県魚沼地域における「外国人花嫁」の存在の歴史的社会的意味の探求 (1)」 『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』 7, pp.587-598.
- (15) クォン・グヨン, パク・グンウ (2007) 「国際結婚移民女性の精神健康に影響する要因 : 全羅南道の国際結婚移民女性を中心として」 『社会研究』 14(2), pp.187-219.
- (16) パク・ジョンスク, パク・オクイム, キム・ジンヒ (2006) 「国際結婚移民女性の家族葛藤と生活満足度に関する研究」 『韓国家庭管理学会誌』 25(6), pp.59-70.



- (17) クォン・ボクスン, チャ・ボヒョン (2006) 「農村地域のコシアン (Kosian) 家庭主婦の意思疎通能力と文化的アイデンティティが結婚満足度と与える影響」『韓国社会福祉学』58(3), pp.109-134.
- (18) ヤン・オクキョン, キム・ヨンス, イ・バンヒョン (2007) 「ソウル居住の国際結婚移民女性の文化適応と社会的支援サービスに関する調査研究」『ソウル都市研究』8(2), pp.229-251.
- (19) キム・オナム (2005) 「移民女性の夫婦葛藤の決定要因に関する研究」カトリック大学大学院博士学位論文.
- (20) Shah, I. D. and Menon, I. (1997) : Violence Against Women Migrant Workers : Issues, Date, and Partial Solutions. *Asian and Pacific Migration Journal*, 6(2), pp.5-30.
- (21) Easteal, P. (1966) : Violence Against Immigrant Women in the Home. *Family Matters*, 45, pp.26-30.
- (22) Rhee, S. (1997) : Domestic Violence in the Korean Immigrant Family. *Journal of Sociology and Social Welfare*, 24(1), pp.63-77.
- (23) Abraham, M. (1999) : Sexual Abuse in South Asian Immigrant Marriages. *Violence Against Women*, 5(6), pp.591-618.
- (24) Bui, H. N. and Morash, M. (1999) : Domestic Violence in the Vietnamese Immigrant Community. *Violence Against Women*, 5(7), pp.769-795.
- (25) Raj, A. and Silverman, J. (2002) : Violence Against Immigrant Women : The Roles of Culture, Context, and Legal Immigrant Status on Intimate Partner Violence. *Violence Against Women*, 8(3), pp.367-398.
- (26) Raj, A. and Silverman, J. (2002) : Intimate partner violence against South Asian women in greater Boston. *Journal of American Medical Women's Association*. 57(2), pp.111-4.
- (27) Menjivar, C. and Salcido, O. (2002) : Immigrant Women and Domestic Violence : Common Experiences in Different Countries *Gender & Society*, 16(6), pp.898-920.
- (28) Rianon, N. J. and Shelton, A. J. (2003) : Perception of Spousal Abuse Expressed by Married Bangladeshi Immigrant Women in Houston, Texas, U. S. A.. *Journal of Immigrant Health*, 5(1), pp.37-44.
- (29) Raj, A. and Silverman, J. (2003) : Immigrant South Asian Women at Greater Risk for Injury From Intimate Partner Violence. *American Journal of Public Health*, 93(3), pp.435-437
- (30) Kim, Jae-Yop. and Emery, C. (2003) : Marital Power, Conflict, Norm Consensus, and Marital Violence in Nationally Representative Sample of Korea Couples. *Journal of Interpersonal Violence*, 18(2), pp.197-219.
- (31) Kasturirangan, A., Krishnan, S. and Riger, S. (2004) : The Impact of Culture and Minority Status on Women's Experience of Domestic Violence. *Trauma, Violence, & Abuse*, 5(4), pp.318-332.
- (32) Lee, E. (2007) : Domestic Violence and Risk Factors among Korean Immigrant Women in the United States. *Journal of Family Violence*, 22, pp.141-149.
- (33) Lazarus, R. S. & Folkman, S. (1987) : Transactional theory and research on emotions and coping. *European Journal of Personality*, 1 : pp.141-169.
- (34) 柳漢守, 桐野匡史, 金貞淑, 尹靖水, 筒井孝子, 中嶋和夫 (2007) 「韓国都市部における認知症高齢者の主介護者における介護負担感と心理的虐待」『日本保健科学学会誌』10(1), pp.15-22.
- (35) 桐野匡史, 矢嶋裕樹, 柳漢守, 筒井孝子, 中嶋和夫 (2005) 「要介護高齢者の介護者の負担感と心理的虐待の関係」『厚生指標』52(3), pp.1-8.
- (36) Han-Su YU, Ki-Wook Um, Yuong-Eun Chong, Jung-Suk Kim, Kazuo Nakajima (2008) : The relationship between recognition of stress and abuse and neglect in the family care giver. *International Journal of Welfare for the Aged*, 18, 59-75.
- (37) 唐軼斐, 矢嶋裕樹, 桐野匡史, 種子田綾, 中嶋和夫 (2005) 「児に対するマルトリートメント傾向の測定」『日本保健科学学会誌』7(4), pp.269-276.
- (38) 唐軼斐, 矢嶋裕樹, 中嶋和夫 (2007) 「ストレス認知理論を基礎とする児に対するマルトリートメントの発生メカズム」『厚生指標』54(4), pp.13-20.
- (39) Ho-Joong Lee (2008) : Analysis of Domestic Violence Law and Practice Over The Last 10 Years. *Korean Criminological Review*, 19(3), pp.127-169.

---

## Multicultural family husband in Taiwan maltreated by wife

Jungsoo Yoon, Hideki Momose, Yasuhiro Kuroki and Kazuo Nakajima

---

This research was aimed at clarifying frequency of Husband Abuse which the multicultural husband in Taiwan maltreated by a wife in everyday life and relevance with husband's feelings of the negation for the wife. A husband of the multicultural family who lives at Taipei city, Takao city, Taipei prefecture and taoyuan prefecture was participated in this investigation.

The investigation contents constituted with an attribute (husband's present age and age at the time of the marriage, religion, educational background, an income, family constitution, marriage continuance, wife's present age and age at the time of the marriage, nationality, religion, communication ability), frequency of the abuse (Husband Abuse) that a husband received from a wife, negative feelings towards wife.

Based on 186 people's collected data(collection rate 93.0%), I analyzed adaptability to the data of the causation model of the husband of multicultural family that maltreated by wife(seven factors) as independent variable, negative feelings towards wife as dependent variable with the structure equation modeling. At this time, husband's income and wife's communication ability were put in as a control variable. As a result, the causation model which considered according to the above-mentioned factor fitted in with data respectively. In addition, as for the pass coefficient for the negative feelings for the wife of above Husband Abuse, it was "sexual abuse" 0.704, "social abuse" 0.641, "abuse of the psychology"0.597, "violence of the language" 0.576, "abuse of the body" 0.496, "abuse of the economy" 0.412, "neglect" 0.358.

**Key words** : multicultural family, abuse, negative feelings